

令和 8 年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

地域のニースやグローバル化する社会の要請に応える教育活動を展開し、地域や次代を支えリードする人物を育成する。
自立支援コースを設置する総合学科の高校として、

- 1 多様な学びを通して能力・適性を伸ばし、自らの将来を展望し、目標達成に向かう自己実現力を育む。
- 2 急速に変化する社会の中でも、広い視野を持ち、自らの社会での役割を見出し、活躍できる「自主、自律、創造」の力を育む。
- 3 本校で身につけた知識や経験に自信と誇りを持ち、様々な困難に立ち向かっていくとともに、他者を理解し、協働できる寛容な心を育む。
- 4 地域に根ざす高校として、学校、地域における教育資源と社会資源を相互活用しながら交流を推進し、一層地域に信頼され愛される学校をめざす。

2 中期的目標

1 確かな学力の育成と授業改善
(1)「わかる授業」により、生徒の自己肯定感を向上し、自ら学びに向かう姿勢の一層の向上をはかり、進路実現へとつなぐ取組を進める。
ア 主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくりを進め、授業を通して、生徒の「自己実現力、協働力、深く考える力」を培う。
イ 授業展開においては、総合学科の特性を活かし、生徒に合った学習形態、ICT 機器の使用等工夫することによって生徒の「学習力」を引き出す。
ウ 「産業社会と人間」「総合的な探究の時間」をはじめ、全ての科目で課題設定をし、解決・情報収集・整理・分析・まとめ・表現能力を育む。
(2)「指導と評価の一体化」の視点から、学習指導の在り方を見直し、授業の質の向上を図る
ア 観点別評価を活用し、「指導と評価の一体化」により、評価を指導の改善にいかし、授業の質を高め、生徒の学びに向かう力を養う。
イ 学習力向上チームにより、教科の枠を超えた授業公開や研究協議を計画実施し、学校全体で積極的に授業改善に取り組む。
ウ 授業の振り返りやデジタルコンテンツ等を活用し、成果を可視化、フィードバックすることで、個々の生徒の能力を伸ばす。
【R10 年度までの到達目標】 ※「自己診断」とは 学校教育自己診断 を示す。
○ 自己診断（生徒）における「わかりやすい授業」の肯定率 80%以上をめざす。 [R5:72.6% → R6:67.3% → R7:71.1%]
○ 自己診断（生徒）における「工夫をしている先生多い」の肯定率 80%以上を継続する。 [R5:86.9% → R6:84.1% → R7:85.0%]
○ 自己診断（生徒）における「考えをまとめたり発表する機会多い」の肯定率 80%以上をめざす。 [R5:72.1% → R6:79.7% → R7:78.5%]

2 人権教育を土台としたキャリア教育の推進
(1) 自分を大切にし、他人を尊重する立場から、生徒自らが基本的生活習慣を確立する態度を育て、進路保障につなげていく。
ア 人権の大切さを学ぶ中で、命の尊さを知り、自分も他人も大切にする心を育む。
イ 生徒自らが、挨拶、礼儀、身だしなみ等マナーを身につけていく中で、自分や他人の進路保障につながるという意識を醸成する。
ウ 生徒自らが、基本的生活を確立しルールを守っていく中で、誰もが安心し、落ち着いて学習活動に取り組めるよう、規範意識を育む。
(2) すべての教育活動の土台を人権教育とする観点から、3年間を見通した人権教育・キャリア教育を計画的、総合的に推進し、自己実現に必要な能力や態度を育成する。
ア 教職員は、自ら人権感覚を一層磨き、人権意識を高め、人権を尊重した教育活動に努める。
イ「産業社会と人間」「総合的な探究の時間」LHR 等を活用し、3年間を見通した人権教育・キャリア教育を行い、科目選択も含め生き方を考える機会を積極的に作る。
ウ 自立支援コース生の進路実現に向け、校内サポート体制を充実させるとともに、関係諸機関と連携し、就労に向けた取組を多面的継続的に行う。
【R10 年度までの到達目標】
○ 自己診断（生徒）における「進路や生き方について考える機会がある」の肯定率 80%以上を継続する。 [R5:91.2% → R6:94.7% → R7:92.2%]
○ 進路実現率 100%をめざす。 [R5:99.1% → R6:85.0% → R7:95.1%]
○ 自己診断（生徒）における「先生の指導には納得できる」の肯定率 75%以上を継続する。 [R5:70.7% → R6:69.7% → R7:75.0%]
○ 年間遅刻総数 4000 件以下（めやすとして各クラスで1 週間の遅刻6 件以下）をめざす。 [R5: 7298 → R6: 5300 → R7:8553]

3 「自主・自律・創造」力と「協調・協働」力の育成
(1)総合学科の多様な学びを通して、1 年次で「聴く力・話す力」、2 年次で「調べる力・考える力」、3 年次で「決める力・行動する力」を身につけ、生徒が自主的に活動し、自らの才能を開花させることができる環境を整え、自己実現を図る。
ア 学校行事や特別活動を通して得られる連帯感、集団活動によって味わえる成就感・達成感を体験し、自主・自律・想像力につなげる。
イ 生徒がお互いのちがいを理解し、ともに学び、ともに育つことによって認め合い、将来においても共生・協働できる姿勢を育む。
ウ 国際理解教育を進めるため、海外の生徒と交流する機会を設ける。
(2)他校種や地域との連携を深めるとともに、学校情報の積極的な発信を行い、地域や保護者からより一層信頼される学校をめざす。
ア 地域に根ざす学校として、近隣の幼小中学校や、大学・専門学校・福祉施設等との連携をすすめ、生徒の持つ幅広い資質・能力をさらに伸ばす。
イ 保護者や地域に学校 Web ページや SNS 等を活用した情報を発信し、教育活動のねらいや気づきを含めた価値の共有を積極的に行う。
ウ 教職員間での生徒情報の共有、支援教育委員会での集約、さらに「チーム貝塚」として SC や SSW 等の専門職とも連携し生徒を支えていく体制を継続する。
【R10 年度までの到達目標】
○ 自己診断（生徒）における「行事はみんなが楽しく行われるように工夫されている」の肯定率 85%以上を継続する。 [R5:89.8% → R6:87.2% → R7:89.1%]
○ 自己診断（生徒）における「悩みや相談に親身になって応じてくれる先生がいる」の肯定率 80%以上を継続する。 [R5:82.1% → R6:76.8% → R7:82.4%]
○ 自己診断（保護者）における「子どもが貝高に入学してよかった」の肯定率 90%以上を継続する。 [R5:94.2% → R6:93.5% → R7:94.6%]

4 力と熱意を備えた教職員集団と学校組織づくり
(1)教員の「働き方改革」を推進するために、地域や外部人材を含めた「チーム貝塚」の意識を高め、時間外在校時間年間 720 時間超教員をゼロにする。
ア 校務運営については、ICT をツールの活用をスタンダードとし、効率化を進める。
イ 会議については、連絡の場ではなく、意見を交換し、理念を共有できるよう、運営方法を見直し有益なものにする。
ウ 学校行事等については、スケジュール感を意識して活動計画を立てる。
(2)教職員が専門職として常に情報をアップデートする姿勢を持ち続けるとともに、「風通しの良い職場」として心身ともに働きやすい環境の維持に努める。
ア 全体の質の向上を図るため、全教職員は校内研修（勉強会）に積極的に参加し、専門職として必要な資質能力を身につけ、さらに相互に高め合う職場環境をつくる。
イ「チーム貝塚」として取組む意識を持ち、生徒情報の共有にいっそう努めるとともに、教職員どうしが助け合える環境づくりに努める。
ウ 非常時の連絡体制を確立し、迅速かつ的確に対応できる校内体制を整える。
【R10 年度までの到達目標】
○ 自己診断（教職員）における「学校は働き方改革に取り組んでいる」の肯定率 75%以上を継続する。 [R5:72.0% → R6:74.5% → R7:78.7%]
○ 自己診断（教職員）における「校内研修は教育実践に役立つ内容」の肯定率 80%以上を継続する。 [R5:76.0% → R6:68.1% → R7:89.4%]
○ 自己診断（教職員）における「気軽に相談し合える職場の人間関係がある」の肯定率 80%以上を継続する。 [R5:84.0% → R6:68.1% → R7:76.6%]
○ 自己診断（教職員）における「組織的に対応できる体制が整っている」の肯定率 80%以上を継続する。 [R5:83.7% → R6:71.7% → R7:76.6%]

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析〔令和 年 月実施分〕	学校運営協議会からの意見

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的 目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標[R7年度値]	自己評価
1 確かな学力の育成と授業改善	(1)「わかる授業」により生徒の自己肯定感を向上し、自ら学びに向かう姿勢の一層の向上をはかり、進路実現へとつなぐ取組を進める。 (2)「指導と評価の一体化」の視点から、学習指導の在り方を見直し、授業の質の向上を図る	(1) ア 総合学科特色ある学びはもちろん、1年次生含めた全科目で主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくりを進め、授業を通して、生徒の「自己実現力、協働力、深く考える力」を培う。 イ 授業展開においては、総合学科の特性を活かし、生徒に合った学習形態、学習支援クラウドサービスを活用する等、工夫することによって生徒の「学習力」を引き出す。 ウ「産業社会と人間」「総合的な探究の時間」をはじめ、全ての科目で課題設定をし、解決・情報収集・整理・分析・まとめ・表現能力を育む授業を行う。 (2) ア 観点別評価を活用し、「指導と評価の一体化」により、各クールの評価結果を次クールの授業改善につなげ再度評価し、評価を指導の改善にいかすことで授業の質を高め、生徒の学びに向かう力を養う。 イ 学習力向上チームにより、教科の枠を超えた授業公開や研究協議を計画実施し、学校全体で積極的に授業改善に取り組む。 ウ 授業の振り返りやデジタルコンテンツ等を活用し、成果を可視化、フィードバックすることで、個々の生徒の能力を伸ばす。	(1) ア 自己診断（生徒）の「わかりやすい授業が多い」70%以上に〔71.7%〕 イ ①自己診断（生徒）の「授業に工夫をしている先生が多い」80%維持〔85.0%〕 ②授業でグループ（班）活動することがよくあるを75.0%以上に〔66.6%〕 ウ「考えをまとめたり発表する機会多い」80%以上に〔78.5%〕 (2) ア 1回めより2回めの授業アンケートの「生徒意識」の上昇や各単元の振り返りで確認する。 〔1回め3.45 2回め3.38〕 イ自己診断（教員）の「他教科と話し合う機会がある」75%以上に〔70.2%〕 ウ 自己診断（生徒）の「評価には日ごろの取組も加味」を90%維持〔90.6%〕	
2 人権教育を土台としたキャリア教育の推進	(1)自分を大切にし、他人を尊重する立場から、生徒自らが基本的生活習慣を確立する態度を育て、進路保障につなげていく。 (2)すべての教育活動の土台を人権教育とする観点から、3年間を見通した人権教育・キャリア教育を計画的、総合的に推進し、自己実現に必要な能力や態度を育成する	(1) ア 人権の大切さを学ぶ中で、命の尊さを知り、自分も他人も大切にする心を育めるよう、教員も生徒も相手を尊重した言葉遣いや態度で接する。 イ 生徒自らが、挨拶、礼儀、身だしなみ等マナーを身につけることが自分や他人の進路保障につながるという意識を醸成できるよう、日頃からマナーについて学ぶ機会を与える。 ウ 生徒自らが、基本的生活を確立しルールを守っていく中で、誰もが安心し、落ち着いて学習活動に取り組めるよう日頃から規範意識を育む。 (2) ア 教職員は、常に自ら人権感覚を一層磨き、人権意識を高め、人権を尊重した教育活動に努める。 イ「産業社会と人間」、「総合的な探究の時間」、LHR等を活用し、3年間を見通した人権教育・キャリア教育を行うとともに、授業の中でも実践を通して、生き方を考える機会を積極的に作る。 ウ 自立支援コース生の進路実現に向け、校内サポート体制を充実させるとともに、関係諸機関と連携し、就労に向けた取組を多面的継続的に行う。	(1) ア「命の大切さや社会のルールについて学ぶ機会がある」を80%維持〔88.1%〕 イ 生徒会や生徒指導部によるキャンペーンを年3回行う。〔5回〕 ウ①自己診断（生徒）の「先生の指導に納得できる」70%に〔75.0%〕 ②遅刻件数の減少をめざし、他校等の指導も参考にし、5000件以下に〔8553件〕 (2) ア①自己診断（生徒）の「人権の大切さについて学ぶ機会が多い」80%維持〔88.7%〕 ②年間3回の職員人権研修の精選を行い、内容の充実と参加率70%以上に〔78.7%〕 イ①自己診断（生徒）の「進路情報をよく知らせてくれる」90%維持〔90.0%〕 ②「進路や生き方について考える機会がある」〔92.2%〕 ③卒業生の希望進路実現率100%〔95.1%〕 ウ 自立支援コース生の希望進路の実現100%〔100%〕	

府立貝塚高等学校

3 自主・自律・創造力と協調・協働力の育成	(1) 総合学科の多様な学びを通して、1年次で「聴く力・話す力」、2年次で「調べる力・考える力」、3年次で「決める力・行動する力」を身につけ、生徒が自主的に活動し、自らの才能を開花させることができる環境を整える。 (2) 他校種や地域との連携を深めるとともに、学校情報の積極的な発信を行い、地域や保護者からより一層信頼される学校をめざす。	(1) ア 生徒主体の活動をめざした学校行事や特別活動をめざし、そこから得られる連帯感、集団活動によって味わえる成就感・達成感を体験し、自主・自律・想像力につなげる。 イ 生徒がお互いのちがいを理解し、ともに学び、ともに育つことによって認め合い、将来においても共生・協働できる姿勢を育む。 ウ 国際理解教育を進めるため、海外の生徒と交流する機会を設ける。 (2) ア 地域に根ざす学校として、一層、近隣の幼小中学校や、大学・専門学校・福祉施設等との連携を積極的にすすめ、連携園との教科横断型授業、学年の取り組みやイベントの中に組み込む等、生徒の持つ幅広い資質・能力をさらに伸ばす。 イ 保護者や地域に学校 Web ページや SNS 等を活用した情報を発信し、教育活動のねらいや気づきを含めた価値の共有を積極的に行う。 ウ 担任だけが抱え込むのではなく、副担任、教科担当などがカウンセリングマインドを持ち、生徒の相談窓口を増やすとともに、教職員間での生徒情報の共有、支援教育委員会での集約、さらに「チーム貝塚」として SC や SSW 等の専門職とも連携し生徒を支えていく体制を継続する。	(1) ア 行事満足度平均 95%以上をめざす。 [体育祭 99.1%、文化祭 92.7%] イ 自己診断（生徒）の「行事はみんなが楽しくできるよう工夫」を 85%維持 [89.1%] ウ 海外の生徒との交流は 2 回行う [1 回] (2) ア ①自己診断（生徒）の「地域の人々や近隣の学校と交流機会がある」60%以上 [60.5%] ②部活動で地域との交流を 5 部以上で実施 [4 部] イ ①校長ブログは週 1 回以上更新する。 ②新 HP、Web ページはタイムリーな更新を実施する。SNS 等を活用し生徒主体の情報発信も行う。 ③自己診断（保護者）における「子どもが貝高に入学してよかった」の肯定率 90%以上を継続する。[94.6%] ④学校説明会では、生徒の成果物の活用や生徒会を中心に生徒にも運営に協力してもらう。 ウ ①自己診断（生徒）の「悩みや相談に親身になって応じてくれる先生がいる」80%維持 [82.4%] ②「担任以外で、保健室等相談できる先生がいる」を 60%維持 [66.4%] ③自己診断（教職員）の「教育相談体制が整備され生徒は担任以外とも相談できる」を 80%維持 [87.2%]	
4 力と熱意を備えた教職員集団と学校組織づくり	(1) 教員の「働き方改革」を推進するために、地域や外部人材を含めた「チーム貝塚」の意識を高め、時間外在校時間年間 720 時間超教員をゼロにする。 (2) 教職員が専門職として常に情報をアップデートする姿勢を持ち続けるとともに、「風通しの良い職場」として心身ともに働きやすい環境の維持に努める。	(1) ア 個人の時間外在校時間を毎月示すとともに、教科、分掌、学年等の長時間勤務を出し、分担化できるように働きかけ、年間の時間外在校等時間が年間 720 時間を超える教員をゼロにする。 イ 校務運営については、ICT をツールの活用をスタンダードとし、効率化を進める。 ウ 会議については、会議の目的目標を明確にし、1 時間以内となる運営に努める。 エ 学校行事等については、スケジュール感を意識して活動計画を立てるとともに、生徒の最終下校時刻を守る。 (2) ア 全体の質の向上を図るため、校内研修を精選し、全教職員は積極的に参加し、資質能力を身につけ、さらに相互に高め合う職場環境をつくる。 イ 教職員同士が互いにリスペクトしあい、「チーム貝塚」として取組む意識を持ち、生徒情報の共有にいっそう努めるとともに、教職員同士が助け合える環境づくりに努める。 ウ 非常時の連絡体制を確立し、迅速かつ的確に対応できる校内体制を整え、周知する。	(1) ア 自己診断（教職員）の「学校は働き方改革に取り組んでいる」75%以上 [78.7%] 年間の時間外在校等時間が年間 720 時間を超える教員をゼロにする[0] イ 全教職員がグループウェア等を活用した教職員連絡体制を活用する。 ウ 会議日程、会議録の共有はもちろん、各種会議を有効に機能させる。 エ 生徒最終下校時刻 16:50(付き添いがある場合は 18:00) を厳守する。 (2) ア 自己診断（教職員）の「校内研修は教育実践に役立つ内容」70%以上 [89.4%] イ 自己診断（教職員）の「気軽に相談し合える職場の人間関係がある」を 80%維持 [76.6%] ウ 役割と責任を明確にし、自己診断（教職員）の「組織的に対応できる体制が整っている」を 80%維持 [76.6%]	